

パートナーとしての音楽

ヤング靖子

踊りには(極端な例外を除き)音楽が欠かせません。昨年の8月号ではバレエの三本柱についてご紹介しましたが、踊りの多様化を支えるのは音楽です。「音楽と舞踊」はあまりに当然の結び付きに聞こえそうですが、その結び付きを紐解いていくと、音楽ファンにも舞踊ファンにも舞台鑑賞はもっと豊かな時間になります。

19世紀の音楽～「はじめにバレエありき」の曲作り

歴史を遡ると「プロによる公演」というコンセプトが生まれて以来、あらゆる娯楽の中に踊りという要素が含まれてきました。シェイクスピア文学にも踊りの場面はありますし、オペラにも短いバレエが組み込まれている作品が数多くあります。ベートーベンも踊りを前提とした作品を何曲か書いていますし、イタリアの代表的なオペラ作曲家であるドニゼッティの曲は後にクラシックバレエの名作ジゼル誕生に影響を与えている、という具合です。

19世紀のバレエのほとんどは、その作品のために作られた音楽によって成り立っています。振付や筋書きに沿った音楽が“オーダーメイド”で作られていた時代です。ミンクスやチャイコフスキー等、この時代のバレエ音楽で有名な作曲家の名前は皆様にも馴染みだと思います。ミンクスは「ドン・キホーテ」や「パキータ」を、チャイコフスキーは「白鳥の湖」、「眠れる森の美女」、「くるみ割り人形」という傑作を世に送り出しました。バレエの作曲家は当時、二流と考えられがちでしたが、彼らの作品が時代を超えて愛されている今では、そうした評価が間違いであったことがよく分かります。これらの曲はバレエ用に作られましたが、後世オーケストラのコンサート用にアレンジされたものも少なくなく、忙しい現代の舞台事情に合わせて再編されたものもあります。「白鳥の湖」や「眠れる森の美女」のオリジナルは3時間を超えていましたが、今は2時間程度の上演時間に収まるバージョンが主流です。



19世紀の代表作の一つ「パキータ」(2017年SDT)
7月の野外公演で上演を予定



日本の振付家、島崎徹さん振付の「Unexpected B」
BはベートーベンのB (2019年)



3月と12月のクラシック・シーズンはオーケストラの演奏も楽しみの一つ
「白鳥の湖」(2019年)リハーサルより

20世紀から現代へ～ 組み合わせの進化

20世紀に入ると、ラヴェル、ドビュッシー、ストラヴィンスキーなどの作曲家がバレエ音楽の世界でも活躍します。この中で功績の大きかった作曲家として、ストラヴィンスキーが挙げられます。バレエをご覧になった事がなくても、彼の代表作「火の鳥」や「春の祭典」といった曲名はお聞きになった事がありではないでしょうか。1913年「春の祭典」はパリでの初演で、その不協和音とも取れるような曲調に観客が怒り出し、足踏みや怒鳴り声で演奏がかき消されるほどだった、という逸話が残されています。この曲は近代バレエの礎となった伝説のバレエ団、バレエ・リュス(注*)の依頼で作られましたが、その創立者ディアギレフの「音楽、デザイン、振付の三分野の最も著名で才能のある芸術家達によるコラボレーションが、最高の舞台芸術を創り出す」という信念は、後のバレエの発展に大きな影響を与えました。

時を同じくして、それまでオーダーメイドだったバレエの音楽に、既存の楽曲を解釈して振り付ける動きが生まれます。1909年ショパンの作品を編曲したバレエ・リュスの「レ・シルフィード」が上演されました。この作品は既存の曲を振り付けた新しさ以外に、ストーリーを持たないバレエという意味でも画期的でした。バレエと音楽の関係が進化した瞬間です。



同じく島崎徹さんによる「Blue Snow」(2019年)
やの雪さんが演奏するテルミンの調べに乗せたバレエは幻想的な中に郷愁が漂う

その後もバレエ音楽のヴァリエーションは増え続けました。交響曲にバレエを振り付けたシンフォニック・バレエがトレンドとなった一方、バレエ曲にもプロコフィエフの「ロミオとジュリエット」等の名曲が生まれます。「ロミオとジュリエット」は1935年の完成時、「これでは踊れない(undanceable)」と酷評されましたが、21世紀の今では傑作とされています。「ロミオ、ロミオ、あなたはなぜロミオなの」というジュリエットの嘆きを始め、数々の有名な台詞を持つシェイクスピア劇を一行も話さず演じるのはどんな感じなのかと見る前は不思議な気が致しましたが、幕が上がるとそんな疑問も忘れてしまうくらい音楽が登場人物の心情を謳い上げる素晴らしく濃厚な作品です。

20世紀半ばまでには、教会合唱音楽をはじめ、様々な地域の伝統的な民族音楽も使われるようになりました。また、レナード・バーンスタイン(ミュージカル「ウェストサイドストーリー」)のように舞踊音楽が有名となった作曲家も生まれました。この時代、ネオ・クラシックの巨匠ジョージ・バランシンやフレデリック・アシュトンが数々のクラシック音楽の名曲に舞踊という新しい命を吹き込みました。バランシンはチャイコフスキーを好みましたが、彼が振り付けるとチャイコフスキーが違って聴こえる、と言われる程です。

現代では、映画音楽や、エレクトロニック・ミュージック、サウンドスケープ(音風景)、ループミュージック(繰り返しを多用する音楽、主にダンスミュージック)、環境音楽も選択肢に入るようになり、振付家の選択肢は広がりました。そのような音楽を使うコンテンポラリーでは、きっちり決まった動きや、音楽にぴったり合った動きを振り付けず、動きの始点と終点だけを定めるような方法も増えています。

お互いを高め合うパートナーとして

舞踊のインスピレーションは音楽にその源を求めるという意味において、両者は深く繋がっています。踊りと音楽が互いを高め合う中で、振付はその音楽を最大限に表現する潜在的な力を持っています。例えば2018年にシンガポールダンスシアター(SDT)による世界初演の「Evening Voices」という作品の音楽は、ラフマニノフ作曲の「徹夜祷」でした。ロシア正教の奉神礼のコーラスと踊りの調和が美しく幻想的で、音楽も踊りも元来は祈りに根ざしていた事実を改めて思い出させます。日常生活の規制が続く、心が渇いていると感じる時は、しみじみ見たくなる作品の一つです。作曲家など音楽をテーマにしたバレエ公演に行きますと、いかに舞踊と音楽が喜び溢れるパートナー同士であるかが分かります。両者が一つとなった幸福感が観客を包み込むような忘れられない時間となる事もしばしばです。



祈禱曲に乗せて独特の世界が広がる「Evening Voices」
(2018年Tim Rashton振付)

資料提供: Singapore Dance Theatre(One@the Ballet)

画像提供: Singapore Dance Theatre, Metropolitan Festival Orchestra(Brandon Koh)、三浦丈明、田中七瀬

注* バレエ・リュス

ロシア出身のセルゲイ・ディアギレフが1909年パリで立ち上げたバレエ団。ニジンスキーをはじめとするダンサー、バランシンなどの振付家、ストラヴィンスキーなどの作曲家と、次々に新しい才能を輩出し、ピカソ、マティス、コクトー、シャネルなど当時パリで活躍していたアーティストも取り込み、芸術界に旋風を巻き起こした。最新の舞踊、美術、音楽が「総合芸術」としてバレエに結実し、その後のバレエの発展の道筋をつけ、美術、音楽、ファッションなど多方面に革新的な影響を与えた。



2019年コンテンポラリー・シーズンの抜粋。短い動画ですが、三つの異なる音楽と振付の妙をご覧ください。

プロフィール/近況: ヤング靖子

Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre

以前、芸術監督に「バレエを好きになると、クラシック音楽も好きになる」と言われたことがあります。今月の原稿を書きながら、あの予言は当たったなあと思いました。劇場は関係機関との調整が続いていますが、嬉しいことにコンサートホールには少しずつ音楽が戻ってきました。



「ロミオとジュリエット」で有名な「騎士達の踊り」
TVドラマ「のだめカンタービレ」の挿入曲で日本でもおなじみ(2020年)